今日の学習のポイント（１０/２）

**オーギュスト・ロダン（1840-1917）フランス**

フランスの彫刻家。『近代彫刻の父』と称される。実物の人間からかたどったと疑われるほど徹底した写実表現を行う一方、人間のもつ情念、情熱の表現をさまざまなモチーフによって追求し、終生の大作「　地獄の門　」においてそれらを総合して表現した。

**エドゥアール・マネ（1832-1883） フランス**

印象派の先駆的画家。筆跡を感じさせる流動的な線と伝統的な形式にとらわれない自由で個性的な色彩を用い、近代の日常、風俗、静物、歴史、肖像、裸婦、風景など様々な画題を描いた。特に、前面から光を当てて人物などを平面的に表現する手法には　浮世絵　からの影響がみられる。

**クロード・モネ（1840-1926） フランス**

印象派を代表する巨匠のひとり。自然の中で輝く外光の美しさに強く惹かれ、その探求と表現に生涯を捧げる。有彩色同士を混合させない絵具での　筆触分割　（色彩分割）によって自然界の光（太陽光）と大気との密接な関係性や、水面に反射する光の推移、気候・天候・時間など外的条件によって様々に変化してゆく自然的要素を巧みに表現した作品を手がける。印象派の名称は、1874年のモネやルノワールらによるグループ展で出品されたモネの「印象・日の出」に対し、批評家が「単なる印象に過ぎない」などと酷評したことを逆手にとって、自らを印象派と称したことに由来する。

**ピエール＝オーギュスト・ルノワール （1841-1919） フランス**

印象派を代表する巨匠のひとり。流動的かつ奔放な筆勢や、明瞭で多様な色彩、豊潤で官能的な裸婦の表現、揺らめく木漏れ日による人物や風景への効果を研究した斑点状の描写など特徴的な表現で数多くの作品を制作した。「芸術が　愛らしい　ものであってなぜいけないのか。人生は不愉快な事ばかりだから、これ以上世の中に不快なものを増やす必要はないんだ。」

**フィンセント・ファン・ゴッホ （1853-1890） オランダ**

ポスト印象派の中でも最も有名な画家。絵の具の質感を顕著に感じさせる力強く荒々しい、やや長めの筆触や、絵の具本来の色を多用した強烈な色彩による対象描写で数多くの作品を制作。特に画家の内面をそのまま反映したかのような迫真性の高い独自の表現は野獣派（フォーヴィスム）や　ドイツ表現主義　など後世の画家に大きな影響を与えた。生前はわずか１点しか作品が売れなかったものの、1990年に競売で当時最高額の約　　125億　　円（日本円換算）で落札されるなど現在ではその作品が高額で取引される画家の一人である。

**ポール・ゴーギャン（1848-1903）フランス**

ポスト印象派を代表する画家。印象主義の筆触分割への反発としてゴーギャンとエミール・ベルナールが提唱し、生み出された描写理論　クロワゾニスム　　（対象の質感、立体感、固有色などを否定し、輪郭線で囲んだ平坦な色面によって対象を構成する描写）と、表現　総合主義　　（自然形態の外観、主題に対する画家自らの感覚、線・色彩・形態についての美学的な考察を「総合」すべきという考え方）によって表現としての新たな様式を確立した。また後年タヒチでの絵画制作など、プリミティヴィズム（原始主義）の先駆的な活動を行う。象徴主義の画家と位置づけられる場合もある。

**象徴主義**

写実主義や印象派が目に見えるものをどう表現するか、を問題にしていたのに対し、象徴主義は人間の内面や夢、　神秘性　などを象徴的に表現しようとした。ギュスターヴ・モローなどが代表的な画家である。文学上の象徴主義と関連して名づけられた。フランス象徴主義の先駆として、イギリスの　ラファエル前派　が挙げられる。アール・ヌーヴォーなど世紀末芸術にも大きな影響を与えた。

**印象派**

　19世紀後半にパリで伝統的なアカデミー様式と対立した画家らによる前衛芸術運動。陽光の輝きの探求するために戸外制作をおこなうほか、日常生活で生まれた余暇を過ごす人々やガス灯による夜の情景など当時の近代性を心象そのままに表現。細く小さな筆勢によって絵具本来の質感を生かした筆触分割（色彩分割）を用いて対象を表現する。光学理論や色彩論に基づき色彩分割の科学的な体系化を試みた　　新印象派　　や、それらの影響を受け（時には否定し）ながら独自の表現様式へと発展させた　　ポスト印象派　　（後期印象派）なども広い意味で印象派に加えて論ぜられることもある。

**ポスト印象派**

印象派に出発しながら、その構成の不足や視覚への過度の依存などに対する反動と修正として形成されたセザンヌ・ゴッホ・ゴーギャンなどの、それぞれ個性的な芸術傾向の総称。20世紀美術の諸傾向に影響を及ぼした。（以前は「後期印象派」と呼ばれた。）

**ジャポニスム**

ヨーロッパで見られた日本趣味のこと。19世紀中頃の万国博覧会への出品などをきっかけに、浮世絵を初めとする日本美術が注目され、その自由な平面構成による空間表現、鮮やかな色使いが画家たちに大きな影響を与え、絵画は　写実的　でなければならないという制約から解き放つきっかけとなった。写実表現が衰え、印象主義を経てモダニズムに至る変革に対して決定的に作用を及ぼしたのがジャポニスムであったと考えられている。一時期の流行にとどまらず、それ以降1世紀近く続いた世界的な芸術運動の発端となった。